

## 花をわが生きる道と信じて

吉池貞藏



創立100周年記念祝賀会の日 渡邊重吉郎先生と  
(左が筆者)

### 園芸学部に進もうと思った動機

少年時代は農家に生れたので夏は養蚕と米麦作りの手伝いに追われる状況であったが、今思えばこれも貴重な体験だと思っている。

第2次大戦終戦の年は小学校高等科2年であった。学校では教科書もない状態であったが、今後のことを考えてか担任の先生は、肥料学の授業とユーゴアの『レ・ミゼラブル』の話をしてくれた事だけは記憶に残っている。

卒業後は農学校に進んだ。千葉大園芸学部に進もうと思ったのは、先生の影響と農家の見学会が大きかった。

先生では県農試から講師で見た平尾陸郎先生(園・昭和14年卒)の生態学的な野菜の授業は大変興味深かった。これを契機に園芸雑誌や園芸の単行本等を求めるようになった。

農家見学では西村二通園(西村鉄砲百合、西村カーネーションの育成園)である。昭和23年頃はまだ食糧難で修学旅行には米を持参しなければならない時代に水田を使って、カーネーションや百合を栽培しているのに驚いた。

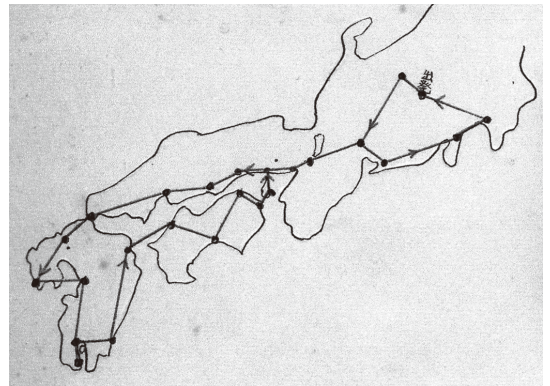
卒業年になり、進学を考えたが能力がない上に遊び

すぎたので千葉大園芸学部は無理だと思い、どうやら近くで入れそうかなと思われる信州大学教育学部に進むことにし入学したが、どうも園芸が忘れられず、翌春園芸学部を受験した。信州大学在学中に、帰り道、途中下車して二通園の圃場を見に行った記憶がある。

### 松戸時代22日間1人旅

昭和26年春、念願かなって園芸学部に入学できた。信州育ちで戦後食べ物にだけ追われていた若者の目に映った学部の第一印象は、建物と調和した庭園の美しさだった。サンクガーデンの美しさもさることながら、私には古びた木造1階建の本館とその前に生垣の混植された刈込、玄関前のイタリア式庭園と花壇、いつも手入れの行き届いた庭には驚いた。

学生時代の1つに22日間1人旅がある。当初は花の専攻生で春の3月休みに九州方面に見学に行こうと話し合っていたが、卒論等の関係で次々と時間が取れなくなり、誰も参加できなくなった。さいわいか私の卒論はユキヤナギの促成がテーマなので、それまでの期間は時間がとれそうなので思い切って、このチャンスを逃がすと2度と来ないと思い、1人で行くことにした。



松戸時代22日間1人旅旅行図

級友の話によると「先生から紹介状をもらって行く  
とよいよ」とのことなので、藤井先生と穂坂先生にお  
願いで紹介状を書いていただき、3月22日に信州を  
出発し、4月12日に帰って来た。1人旅なので気楽に  
1冊のガイドブックを相手に途中で次の見学場所をき  
め、動くという計画で、今考えると大変無謀な行動で  
ご迷惑をおかけした事を、この席でおわびしたいと思  
っている。この旅行で今でも脳裏に残っている思い出  
を2~3紹介したい。

藤井先生から紹介状をいただき農水省の久留米支場  
に伺った際は、熊沢支場長さんが直接案内して下さい  
ました。宿泊場所は未定と答えたら同場に勤務しておら  
れた宮城耕治先輩（園・昭和18年卒）が、我が家に泊ま  
れと案内して下さいました。宮城さん宅で驚いたのは当時  
神田の古本屋でも中々手に入らなかった石井勇義著  
『原色園芸植物図譜』の3冊。話が進む内に自分には  
必要としない図書なので譲ってもよいとのことでした  
ので早速お願いして求めた。今でも私の書棚に立っ  
ている思い出の図書である。この他2年先輩で当時大分  
県温泉熱利用研究所に勤務しておられた武田和男さん、  
淡路島では1年先輩の新田鉄郎さん宅にもお世話にな  
り、淡路のカーネーションを、高知県では雨森広志  
さん（別・昭和29年卒）宅にもお世話になり、広大な  
春の施設園芸野菜の状況を見せていただいた。

今考えても皆さんに感謝、感謝のみですが、千葉大  
園芸学部の学生と云う看板も大きかったなとつくづく  
思っている。

## 産業となる花を求めて

卒業後約1年間、園研（財）日本園芸生産研究所）  
に所属し、花の研究室の手伝いをした。当時は転職先  
も少なく、ましてや花の栽培の仕事ができるような場  
所はほとんど無かった。私と同様に卒業後、園研に所  
属し、果樹の研究室の手伝いをしていた同級生に岩手  
出身の高橋三千三君がいた。彼からの紹介で、盛岡の  
農業高校で花と造園を担当する教員を探しているの  
で行かないかとの話があり、そんなことから岩手に行く  
ことになった。

農業高校なのでここでは“産業となる花”に挑戦し  
てみようと思った。学校の方針も教科の範囲であれば  
何を栽培してもよかった。産業となる花を考えた時、

東北の夏の冷涼な気候を生かすのは先進県長野の花き  
栽培を学ぶのが近道だと思った。露地カーネーション  
の夏秋どり、菊のシェード栽培、新鉄砲百合の露地栽  
培等を手がけた。

栽培した花を花市場に出荷する内に花屋さん達と知  
り合いになった。その1人が細川五兵衛氏である。

氏は栽培されている花のみでなく、各地の山野に自  
生している花材をよく知っていた。その1つがリンド  
ウである。県内各地に自生しているリンドウでも、此  
処では何時頃咲いて、どんな特徴（花色、葉形等まで）  
があるかをよく知っていた。そこで私は、この自生地  
を地図の上に記入し、その時期に現地に見に行くこと  
ができた。当時はまだ実生からの栽培法が確立されて  
いない時期なので山野から自生株を掘り、栽培し、こ  
の切花を客車便で東京の青山生花市場に出荷し、好評  
を得たことが後のリンドウ研究に大きな力となった。

当時、青山生花市場に隣接していた第一園芸で、花  
卉装飾を担当されておられた永島四郎先生（大正10年  
卒）からのアドバイスも、大変大きかったように思っ  
ている。

## リンドウの栽培法と育種への挑戦

岩手では昭和37年に農業試験場から園芸試験場が独  
立することになり、花の研究も始めることになった。  
そんな事から新設された県園試に昭和38年から勤務す  
ることになった。

当初は県で進めていたスイセンの球根生産が中心テ  
ーマであった。これは橋本昌幸氏（園・昭和24年卒）  
等の働きかけで県が予算化し、オランダ等からスイセ  
ンの球根を導入し、これを増殖し、販売する方式で一  
時は全国の主要なスイセン球根生産地となったが、ス  
イセンは増殖率が低いので、中々面積の拡大には伸展  
しなかった。

一方、農業高校時代に山堀りからのリンドウ栽培を  
進め、成果を上げた地帯も株が古くなり更新しように  
も苗生産が確立していなかったため、継続できない状  
況にあった。早く実生からの苗生産を確立しようと思  
っていた矢先、種子の休眠打破技術が解明されたので、  
これと灌水ノズル等を利用することにより、大量育苗  
が可能になったことがわかってきた。大量育苗が可能にな  
れば、やがては揃った高品質のものが要求される時代が

来ると思い、育種を始めることにした。

当初は揃った品種をつくるために自殖を2～3代重ねると花色等は揃ってくるが、株が著しく弱くなるのがわかった。そこでF<sub>1</sub>育種を思い出し、育成途中のものを交雑すると予想以上に揃いも良く、株も強くなる事がわかった。このことから、これからのリンドウの育種はF<sub>1</sub>育種で進むのがよいと思った。

そうして育種した品種が‘いわて’でリンドウでは最初の種苗登録品種となった。その後の鉢物用の‘いわて乙女’等いずれの品種もF<sub>1</sub>品種である。



リンドウの品種として初めて種苗登録された  
‘いわて’

昭和49～55年春まで7年間は県の南東沿岸にある県園試南部分場（陸前高田市、平成23年の地震で津波の大被害を受けた処）に勤務したが紙面の関係でここでは割愛する。

7年後また本場にもどり、野菜も見なければならなくなつたうえに場全体の研究調整関係も見なければならぬ事になり、日々そんな仕事に追われ、研究らしい仕事はできなかつた。2年間の場長時代もあつという間に過ぎ、魅力はわかかなかつたが、退職時に県内各地の花生産者が中心となり、激励会をしてくださつたのは忘れられない思い出である。

## 生産者と共にした産地づくり

平成4年からは以前から現地からの要望もあつた県の北西部（秋田と青森の県境）の山あいの小さな町あしろちょう安代町（人口約6,000人）で花の産地づくりの手伝いをするにことにした。

この町でのリンドウ栽培は昭和46年の当初から関わつてきた場所でもあり、熱心な生産者の他に農協、役

場も協力体制がよいので是非よい産地を作りたいものだと思つた。生産者自らの資金と普及所の協力を得て、リンドウの育種にも取りかかつたが、職員の移動等もあることから、どうしても継続できる研究体制が必要であることを認め、平成4年には役場と農協の協力を得て「安代町花き開発センター」を設置し、そこでリンドウの育種を進めてほしいとのことであつた。実状は私と農協からの協力を得た職員1名の計2名で農協の1室を借りてスタートした。

このような経過で設けられたこの施設も平成8年には町立の「花き開発センター」となり職員も4名、施設も充実し、本格的な研究ができるようになった。

ここの研究体制のよい点は研究と生産、販売がよく結びついている点だと思つている。当初は職員が圃場管理もしていたが、これでは十分な特性が見られない場合があり、現在はすぐれた生産者に栽培管理を委託し、職員はその調査に専念し、この中より実用化可能と思われる品種を選ぶ方式である。これにより実用的な品種も次々と育成され、ブルー系の品種では7月上旬から11月上旬まで欠けることがなく出荷できる体制もできたし、その他、白、ピンク、白とブルーの2色花等も次々と育成されるようになった。



各地区の生産者は産地全体の品質向上のために  
全圃場を巡回する（安代町）

生産者数は180名前後であるが、生産額は平成6年以降はコンスタントに10億円は超えるようになり、全国のリンドウ生産額の約20%余を占めるようになった。受賞歴も多く、昭和60年には朝日農業賞、平成8年には日本農業賞大賞、平成9年には農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞し、育種部門でも平成25年には日本育種学会賞を受賞している。

一方、海外にも目を向け、平成4年からは、南半球のニュージーランドともリンドウを通しての交流が深まり、安代町で育成した品種は南半球のニュージーランド、南米・チリでも栽培が始まり、北半球向けの輸出も始まっている。



ニュージーランドでのリンドウの栽培指導

私にとって、此处での12年間は最も楽しく充実した期間であったように思っている。そしてここでの実績

が認められたのか平成24年秋には叙勲を、平成25年の春には赤坂御苑での「園遊会」にもお招きいただいた。

もうこの年になって何も役立つ仕事はできないが、肩書だけは「一般社団法人 安代リンドウ開発 終身名誉顧問」という名称をいただき、年に数回おとずれている。

### 自宅での趣味園芸

平成4年から12年間勤めた「安代町花き開発センター」を後継者も育ったので退職し、自営を望む娘の希望もあって新たに50a余の土地を求め、住居を移し、その一部で趣味のバラ栽培と育種を始めることにした。

これについては『花葉』の2011年No.31「バラの栽培と育種を楽しむ」で紹介させていただいたので、今回は割愛することにするが、この年（83才）でこれから何時まで目標とする育種を続けることができるかは不明だが、目標の耐病性トゲ無しのガーデンローズに挑戦したいと思っている。



自宅にてバラの植付床づくり